

一份诚挚的『在日本』邀请·集结旅日三十年异域文化体验

日语全文朗读

来日方长

毛丹青 著

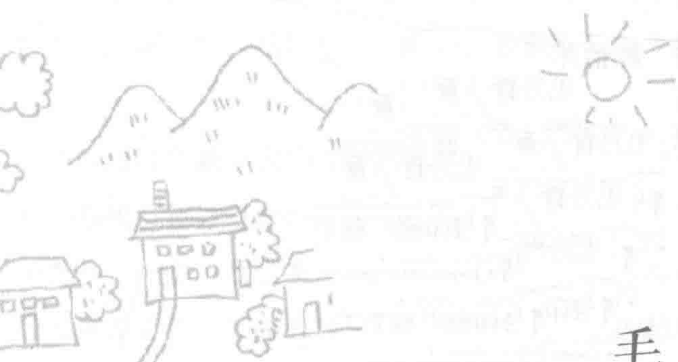
世界图书出版公司

一份诚挚的『在日本』邀请
集结旅日三十年异域文化体验

来日方长

毛丹青

著



世界图书出版公司

上海·西安·北京·广州

图书在版编目(CIP)数据

来日方长: 日汉对照 / 毛丹青著. — 上海: 上海世界图书出版公司, 2016.8

ISBN 978-7-5192-1642-9

I. ①来… II. ①毛… III. ①散文集—中国—当代—日、汉
IV. ①I267

中国版本图书馆CIP数据核字(2016)第170996号

责任编辑: 苏 靖 陈怡萍

责任校对: 石佳达

装帧设计: 高家鋈

来日方长

毛丹青 著

上海世界图书出版公司 出版发行

上海市广中路 88 号 9-10 楼

邮政编码 200083

上海景条印刷有限公司印刷

如有印刷装订质量问题, 请与印刷厂联系

(质检科电话: 021-59815621)

各地新华书店经销

开本: 890×1240 1/32 印张: 7.75 字数: 230 000

2016 年 8 月第 1 版 2016 年 8 月第 1 次印刷

ISBN 978-7-5192-1642-9 / I · 54

定价: 38.00 元

<http://www.wpcsh.com>

目次 / 目录



1 日常を読む 阅读日常

桜の花びらが舞っていた 樱花纷飞 / 3

超載の北京 超载的北京 / 9

近所の旅 周边之旅 / 21

ぼくの秀水街 我的秀水街 / 32

祖母と小鳥 祖母和小鸟 / 38

知ることへの誘い “知” 的邀请 / 43

私と満員電車 我与满员电车 / 52

東京には大きな鳥かごがある 东京有个大鸟笼 / 58

2 風情を読む 阅读风情

日本を知った最初のころ 初识日本 / 67

喜びの料理 喜悦的料理 / 76

一番美しいものは風景ではない 最美的不是风景 / 84

新幹線の鼻はだんだん長くなる 新干线的鼻子越来越长 / 92

炎天下の結婚式 烈日下的结婚仪式 / 105



バスとともに「魚」になる 随着巴士变成鱼 / 109

壁の上の空き缶 墙上的空罐子 / 121

孤独は飛んでいかない 挥之不去的孤独 / 129

神島の空 神岛的天空 / 135

静けさによる落ち着き 安静下的沉着 / 141

非母国語としての日本語 非母语的日语 / 147

古道の寺院 古道中的寺院 / 153

3 人生を読む 阅读人生

梅田駅の喫茶店 梅田站的咖啡店 / 161

田舎力 田舍力 / 165

飛禅高山 飞禅高山 / 169

虚境の旅人 虚境中的旅人 / 177

本居宣長と私 本居宣长和我 / 182

彼は僕の心に生きている 他活在我心中 / 191

新刊本『恵恵』に寄せて 寄语新书《惠惠》 / 199

中国研究者竹内実先生 汉学家竹内实先生 / 207

名古屋の職人 名古屋手艺人 / 213

風は心から湧き上がる 风从心底而来 / 219

あとがき 后记 / 230

编后记 / 232

「
① 阅读日常
」
日常を読む



桜の花びらが舞っていた 桜花纷飞



クちゃんを子供のように扱、と溺愛
しているわれわれ夫婦、ときどきかなり
無視されたりしていた。誰かが言った
ように「真の子供独を知るには多量に
無視されとみる」とのことだが、
しかしわれわれは子供独を感
ているとは限らないはずだ。

まつだ せんせい じゅう い とうきょう どうぶつびょういん かま
松田先生は獣医で、東京できれいな動物病院を構えている。

とお 遠くからは積み木を積み上げたように見える建物では童話のよう

な色彩で、オレンジ色の壁の間に通路がある。通路はピンク色で、

ひざ 陽射しの無いときでも明るく、ときには眩く感じることもある

ほどだ。通路沿いの階段があり、足元の床板はキシキシ音をたて

る。おかしなことに、前に松田先生を訪ねたときに、ちょうど梅

雨時で、普通のアスファルトの道を歩いているときには、細かい雨

が地面に落ちる瞬間に空気中の雨が振る音がかすかに聞こえる

くらいだった。しかし、松田先生の診察室の階段を昇るときには、

あしもと おと へん か あまおと かいだん かわ おと か
足元の音が変化し、雨音がももとの階段のあの乾いた音から変

わり、この季節には木の階段は雨水と顔を合わせないようだ。

まいかいすこ き まつだ せんせい
毎回少し気にかかっていたのだが、松田先生は「それはうちの

ねこ 猫がやってるんだよ。このあたりで何時間遊んでいていれば、雨

が降ったとしても、びっしょり地面が濡れることはないんだ。木

かわ おと ねつ き き いた ぜん ぶ かわ
の乾いた音はしないし、その熱気が木の板を全部乾かしてしまっ

ているみたいだ」

ねこ しゅじん きょうたん とく ねこ
猫が主人を驚嘆させるのはよいことで、特に猫にしてみれば、

しゅじん じぶん きょうたん えつ い さいご すうはい
主人が自分に驚嘆するのは、悦に入るところから最後には崇拜

しているか定かではなく、称賛には足らない。松田先生に至っ

かれ わたし ねこ きょうみ し なに
ては、彼は私が猫に興味をもっているのを知っているので、何

げなく私に話を^{わたし はなし}するのだが、その様子から、猫がまさしく命^{いのち}で、
 彼が^{かれ}ぼーっとしている猫を偏愛^{ねこ へんあい}していることが伺^{うかが}える。しかし、
 時には彼は^{かれ}さほど熱心^{ねっしん}ではなく、ひどいときには黙^{だま}りこくってし
 まう。これはもしかすると松田先生^{まつだ せんせい}が私^{わたし}が彼の^{かれ}言う^いすべての意^い
 味^みを理解^{りかい}していないと心配^{しんぱい}してのことかもしれない。何故^{なぜ}かとい
 うと、もうずいぶん前^{まえ}に、私^{わたし}が中国^{ちゅうごく}の一部^{いちぶ}の地域^{ちいき}では猫^{ねこ}の肉^{にく}を
 食^たべると話^{はな}したことがあるからだ。

猫^{ねこ}の肉^{にく}を食^たべることについては、私^{わたし}は日本人^{にっぽんじん}がクジラ^たを食^た
 べると同じように、食文化^{しょくぶん 文化}の違い^{ちが}いに他^{ほか}ならないと思^{おも}っていた。
 この他に^{ほか}、さらに深い意味^{ふか い み}など説明^{せつめい}できないと思^{おも}っていた。松田^{まつだ}
 先生^{せんせい}は従^{じゅうらい}来^{もんだい}この問題^{ひと}について人^{ひと}と話^{はな}したことはない。彼の視^{かれ}線^{しせん}
 はただ猫^{ねこ}に注^{そそ}がれているのだ。一人^{ひとり}の獣医^{じゅうい}師^しとして、猫^{ねこ}を見^み
 ことは彼の職^{かれ}業^{しょくぎょう}であり、当然^{とうぜん}さらに猫^{ねこ}を見^みるのが好き^すなのは彼^{かれ}
 の興^{きょう}味^みといえるだろう。彼^{かれ}が獣医^{じゅうい}になっただのは、ある夜^{よる}見^みた光^{こう}
 景^{けい}によるものだそう^{とう}だ。当時^{とうじ}彼は^{かれ}まだ少^{しょう}年^{ねん}で、家^{いえ}からそう遠^{とお}く
 ないところ^{どうぶつびょういん}に動物病^{やうぶつびやういん}院^{いん}があっ^{よる}た。ある夜^{かれ}、彼^{ほう}が放^か課^ご後^{いえ}家^{かえ}に帰^{かえ}
 と、一匹^{いっぴき}の黒^{くろ}猫^{ねこ}が力^{ちから}なくうずくまっ^{くろねこ}ていた。しかし、黒^{くろ}猫^{ねこ}は懸^{けん}
 命^{めい}に動物病^{どうぶつびやういん}院^{いん}の方^{ほう}角^{かく}に移動^{いどう}して^{はいご}いた。その背^な後^まに何^{なん}か真^まっ黒^{くろ}な
 塊^{かたまり}があっ^なたが、それが何^{なん}なのかは^みっきり見^{くろねこ}え^{おおごえ}ない。黒^{くろ}猫^{ねこ}は^お大^お声^{こえ}
 で鳴^なき、身^みを引^ひきずり前^{まえ}に這^はった。まもなく、門^{もん}から女^{じょ}性^{せい}の獣^{じゅう}

医^いがでてきて——正^{せい}確^{かく}には彼^{かの}女^{じょ}は助^{じょ}手^{しゅ}だっ^たが——。彼^{かの}女^{じょ}は「黒^{くろ}猫^{ねこ}ちゃん、どうしたの？」とブツブツいいながら、黒^{くろ}猫^{ねこ}の後^{うし}ろを
見^み渡^{わた}した。黒^{くろ}猫^{ねこ}が鳴^ないたのは自^じ分^{ぶん}の為^{ため}ではなく、後^{うし}ろの真^まっ黒^{くろ}な
もの^{もの}のためだ^たったのだ。それ^{それ}も一^{いっ}匹^{びき}の猫^{ねこ}で、深^{ふか}い傷^{きず}をお^おつていた。
黒^{くろ}猫^{ねこ}は病^{びょう}院^{いん}の階^{かい}段^{だん}のそばでず^{はげ}っと激^{さけ}しく叫^{じょしゅ}んでいた。助^{じょ}手^{しゅ}さん
は黒^{くろ}猫^{ねこ}を抱^だきあ^とげ^{たん}た途^と端^{たん}、び^{こえ}っく^でりして声^{こえ}がで^でな^なか^かつ^つた。その黒^{くろ}
猫^{ねこ}が連^つれて^つき^きず^ずお^おね^ねこ^こな^なに^にも^もの^のよ^よう^うし^しあ^あし^しせ^せつ^つだ^だん^ん
で^で負^おつ^つた^た猫^{ねこ}は、何^{なに}者^{もの}か^かによ^よつて後^{うし}ろ^ろ足^{あし}が切^{せつ}断^{だん}さ
れて^ていた^たから^らだ。

松^{まつ}田^だ先^{せん}生^{せい}はこ^このこ^こを話^はす^すと^とき、今^{いま}で^でも激^{げき}怒^どする。更^{さら}に^い言^いえ^えば、
彼^{かれ}の^め目^めはか^あす^あか^かに^まい^{まい}か^かい^いな^なみ^みだ^だな^なが^が
毎^{まい}回^{かい}涙^{なみだ}が流^{なが}れ^れお^おち^ちる^ると^とき、こ^こう^い言^いう。

「その^ひ日^ひ、桜^{さくら}の^{はな}花^{はな}び^らが舞^まつて^ていた^たん^だよ」



松田先生是一名兽医，在东京开了家外装漂亮的动物医院。远远望去好似积木玩具堆砌而成的建筑物，颇有童话色彩，橙色外墙之间辟出一条过道。这条过道是粉色的，即便是阴云天气，没有阳光照耀的日子，也显得很明亮，甚至偶感目眩。沿着过道往前有一段台阶，走在上头时，脚下的地板嘎吱作响。让我纳闷的是，之前来拜访松田先生的时候，恰逢梅雨季，行走在普通沥青道路上，小雨淅淅沥沥洒落于地面的瞬间，仿佛听见了雨丝在空气中的声响。但是，当登上松田先生诊疗室前的台阶时，脚下的声响有了变化。雨丝打在这台阶上，原本干涩的声音也有了不同，感觉在这样的季节，木制阶梯并没有与雨水打照面。

每次来访我都有点在意这个，松田先生这么向我解释道：“这都是我家猫咪干的好事。这家伙要是在这附近玩上几小时的话，即便下过雨，地上也不会变湿。所以就不会听到木头干了的声音，好像是我家猫身上的热气把木地板全部弄干了。”

猫咪让主人感到惊叹倒没什么，特别是如果从猫咪的角度来说，主人对自己表示惊讶，猫咪也会觉得开心，最后会不会变成崇拜之情不能确定，总之对猫咪来说不足以算是称赞吧。至于松田先生，因为他原本就知道我喜欢猫，平时不经意会跟我说些关于猫的事情。我从他的叙述中能看出其爱猫如命，对于爱发呆的猫一直很偏爱。但是，偶尔又会让我觉得他并没有那么热情，有时甚至沉默不语。我猜想，或许松田先生是在担心我是否全部理解了他所说的意思。因为很久之前，我曾和他说起在中国，部分地区有吃猫肉的习惯。

关于食猫肉，我始终认为和日本人吃鲸鱼肉同理，仅仅是饮食文化上的差异。除此以外，无法更进一步解释深层意义。松田先生

从未就这一问题和别人交流过。他的注意力都倾注在了猫的身上。作为一名兽医，观察猫是他的职业需要，当然，喜欢看猫可以说也是他的一个兴趣吧。而他之所以会成为兽医，听说是由于某个夜晚目睹了一个场景。当时他还是青葱少年，家附近不远处有一所动物医院。某天晚上，他在放学回家的路上发现了一只黑猫有气无力地叫唤着。但是，这只黑猫拼命向着动物医院的方向移动。在它身后有一小块黑色的团影，但实在看不清是什么东西。黑猫大声地喵喵叫着，拖着小身子往前爬。没过多久，一名女兽医——准确来说是兽医助手——从门里走了出来。嘴里一边嘟哝“小黑猫，你怎么啦？”一边望向黑猫身后。原来，黑猫并不是为自己叫唤，而是为了身后那团黑影。那也是一只猫咪，身受重伤。而这只黑猫一直候在医院台阶旁拼命喵喵叫。女助手刚抱起黑猫就发现了受伤的另一只猫，一时吃惊得哑口无言。这只黑猫带来的那只受伤猫咪，不知被谁切断了后腿。

松田先生回忆起这段经历的时候，依然一副愤怒的表情。更详细点说，他的眼眶微微泛红，每回说起这段都会流泪，然后说道：

“那天，樱花正纷飞。”

(佩吉译)

超载的北京 超载的北京



Illustrated by
マ・タンセイ®

日本でも、春休み、GW、お盆、
E.A. 花火大会、TDL 等等、
決まりこみ時期に、
かなり渋滞発生。しかも、
これは到着所で待ち構
えている。皆もイライラ...

せんしゅう ねん べ きん き せい
先週 2 年ぶりに北京へ帰省した。

ひこうき お た わたし むか くうき あい か な じ
飛行機から降り立った私を迎えた空気は、相変わらず馴染
のあるものだった。ぜんかい こ きょう はな まち
の 前回故郷を離れるとき、街はどこもかしこ
も ちほり ま こう じ げん ば こんかい き せい まち なか
も土埃の舞う工事現場だったが、今回帰省してみると、街の中
は ずいぶんずいぶん かん こう じ ちゅう め
随分静かになったように感じた。工事中のところは目につか
なくなり、じ が た き ごえ き
地固め機のうなり声もあまり聞こえなくなっている。

けんちく げん ば あし ば かこ こう そう いっ そう いっ そう あたら すがた み
建築現場の足場に囲まれた高層ビルは一層一層と新しい姿を見
せ始め、しゅ と ふうけい かがや しきさい そ わたし
首都の風景に輝いた色彩を添えている。私はこのよう
に へい わ て き ふん い き べ きん ひ と び と し ず
平和的な雰囲気は、北京の人々に静けさをもたらししているだろ
うと おも
思っていたが、このあとの ふつ か かん わたし たい けん なか
2 日間の私の体験の中で、この
かんが かなら あ き
考えは必ずしも当てはまっていないということに気がついた。
もちろんこれは わたし い が い
私にとって意外なことであった。

一、

シンニユー の ぜんもん どの か し こ せん
“神牛”に乗って前門通りをぶらぶらするというのは賢い選
たく ひと シンニユー さんりんしゃ しゃだい
択である。一つには“神牛”ブランドの三輪車の車台にはスプ
リングが と つ くるま ほろ なか ゆうゆう
取り付けてあり、車の幌の中にはいると、悠々なるかな、
き も よ う え ふた シンニユー じゅうたい
気持ちのよいことこの上なし。二つには、“神牛”は渋滞でにつ
ちも さっちも い かな い 道でも すい すい はし い じゅうたい
走って行ける。渋滞で

微動だにしない車^{くるま}を横目^{よこめ}に、ちょっと高貴^{こうき}な人^{ひと}になったような
 感覚^{かんかく}を味わ^{あじ}うことができる。

三輪車^{さんりんしゃ}をこぐ老人^{ろうじん}は話^{はなし}好き^ずで、その声^{こえ}はよく響^{ひび}いた。彼^{かれ}の口^{くち}
 は絶えずぱくぱく開^{ひら}いたり閉^とじたりし、暇^{ひま}を見つ^みけてはこちらを
 振り返^ふり、まるで客^{きやく}が彼^{かれ}のご高説^{こうせつ}を聞^きいているかどう^{かんさつ}か観^{かん}察^{さつ}
 しているか^けのようである。もともと私^{わたし}は車^{くるま}の幌^{ほろ}の外^{そと}に見^みえる景^け
 色^{しき}を眺^{なが}めよう^{かんが}と考^{かんが}えていた^{ふう}のだが、こんな風^{ふう}に観^{かん}察^{さつ}されてい^え
 るのでは彼^{かれ}をがっか^{はなし}りさせない^{みみ}ため^{かたむ}にも、話^{はなし}に耳^{みみ}を傾^{かたむ}けざる^えを得^え
 ない状^{じょうきよう}況^{きよう}になっ^えてしまっ^えた。

「なあ、客^{きやく}さんよ、今^{いま}の世^よの中^{なか}なん^ふでこんな^ふにほら吹^ふきが
 多^{おほ}いん^{まえ}だろ^{ふたり}うね^{いなかもの}え。この前^のわしは二人^{ふたり}の田舎者^{いなかもの}を乗^のせたんだが、
 そいつらは車^{くるま}に乗^のっている間^ま中^{なか}、わしの後^{うし}ろでほらばっか^り
 言^いって^はお^たった。わしは腹^{はら}が立^たち^{はな}ち^なまって、そいつらの鼻^{はな}もち^なら^ん
 ん言^いい^{ほう}ぐ^さを放^{はな}ってお^くこと^ができ^なか^った^のさ。で、わし^がど^う
 う^した^と思^{おも}う？わしはそいつら^{だま}を騙^{だま}して、その場所^{ばしょ}で車^{くるま}から降^お
 ろし^ちま^った^のさ。なに、構^{かま}うも^んか^か…」

「その人^{ひと}たち^とは土^ふ地^{あんない}に不^ふ案^{あん}内^{ない}だ^った^でし^よう？あ^なた^はそ^んな
 人^{ひと}たち^とを途^と中^{ちゆう}で降^おろし^てしま^った^んで^すか？そ^れにそ^んなこ^と
 をし^{たら}、あ^なた^は車^{くるま}代^{だい}を貰^{もら}え^なか^った^んじ^ゃない^です^か？」

私^{わたし}は慌^{あわ}てて“神牛^{シンニユー}”三輪車^{さんりんしゃ}をこぐ老人^{ろうじん}に尋^{たず}ねた。彼^{かれ}の頭^{あたま}はあ

あまり大きくないが、とても精悍な感じがした。

「お客さん、あんたも北京の人間じゃろ？ どうして田舎者に好きなように言わせておくのかね？ わしは大ぼら吹きのお客さんにはみんな降りていただくことにしているんじや。わしは昔っからおもてなしっていうもんがどういふものかわからないんでね」

私は彼が外省人に対して、なぜここまで地元意識をむき出しにするのかわからなかった。もちろん私もほらを吹く訳にはいかなかった。なぜなら、目的地に着く前に彼から追っばられるのはごめんだったからだ。彼の話によると、その途中で降ろされた二人の田舎者は大きな声でわめいて彼の仕事ぶりを罵ったそうである。その結果、彼はただ三文字だけ答えた。

「超载了！（積載オーバーじゃ。）」

私はそれを聞くとおかしくてたまらなかったが、ぐっと笑いを飲み込んだ。

二、

時代とは変化していくものである。一旦その変化のスピードが私たちの想像を超えてしまうと、ある一種の不均衡が生み出さ